

記憶の翻訳：Lyndall Gordon の回想記を巡る考察

早川 敦子

I. 序：「伝記」というフィクション

文学の一形態である「伝記」に深い関心を寄せ、自身も Virginia Woolf や Edith Wharton、Philip Roth ら数々の伝記を著わしてきた Hermione Lee は、英文学研究に於ける「伝記」への注目を受けて、大学生を対象に Oxford University Press が出版している“A Very Short Introduction”シリーズに *Biography* (2009) を上梓している。その中で彼女は、伝記を「他者によって語られた[別の他者の]物語」と定義した上で、それが「事実を羅列して呈示するものではなく、物語のひとつの形である」(Lee, 2009, 5) と述べている。「他者を語る」枠の中には自ずと多くの人間たちの生が取り込まれ、その群像がさらに大きな枠組みとしての「物語」を構築していくからだ。それは過去を現在に引き寄せる物語でもあり、またそこに連続性をもたらすことで歴史を顕現させる物語でもある。

一方、伝記というジャンルそのものが、人間の自己探究というきわめて西洋的な意識の反映であるとみる Laura Marcus は、近年の伝記への関心が「モダニティによるアイデンティティの拡散に対する修復」だと指摘する (Marcus 7)。複層化した社会の中で、あらゆるものが断片的に共存するモダニティは、人間のアイデンティティもはや単一の絶対唯一無二のものとしては語り得ないものであるということ、現代人に気づかせてしまった。そのような精神風土において、再び人間は主体を回復しようと「伝記」を通して人間の全体像を捉える言説を試みる。その過程で、たとえばジェンダーや人種問題がはからずもあぶりだされることとなり、そこでポストコロニアル批評が協働して広汎なアイデンティティ・ポリティックスが展開されていったともいえるだろう。長い黒人差別の歴史の中で主体を奪われた苦しみを語

るノーベル賞作家 Toni Morrison や、Gayatri Chakravorty Spivak が注目するサバルタン研究、また人類の大きな負の遺産ともいえるユダヤ人迫害から生き延びてホロコースト体験を記した作家たちの伝記は、その詳らかな例だ。

ホロコーストを第二世代の視点から捉えた作家 Eva Hoffman の事例は、すでに別稿でも取り上げたのでここでは省略するが⁽¹⁾、彼女がまず自伝 *Lost in Translation: A Life in a New Language* (以下略記 LA, 1989) というかたちで記憶の断片を繋ぎ合わせて過去のトラウマからの解放を自己の物語として描きだす過程を経て、ようやくホロコーストを遠景から透視し、歴史を俯瞰したホロコースト論 *After Such Knowledge: A Meditation on the Aftermath of the Holocaust* (以下略記 ASK, 2004) を世に送り出したことは、きわめて興味深い。自伝の中にとりこまれた多くの他者の物語が構成要素となっており、のちの ASK では個人史を超えてそこに戦後史が書き込まれたからだ。別の言い方をすると、いわゆるポストモダンの「小さな物語」がふたたび伝記を介して別の「大きな物語」を照射することになった。その軸は、ポストコロニアル批評の戦略とどこかで呼応しながら、負の歴史から新たな世界像を再構築していく道程とも重なっているように思える。

ここでは、そのような道程をまた異なる文脈で辿った Lyndall Gordon の「回想記」の試みを取り上げ、伝記という言説が、物語、さらにはフィクションとしてそこに何を拓きうるのか、その可能性を考察する。

Lyndall Gordon は、奇しくも先述の Hermione Lee との対照がひじょうに興味深い伝記作家であり、また同じ Oxford 大学で教鞭を執った contemporary として、英文学研究に於いても一つの領域を開拓した貴重な業績を遺している。とくに優れた研究が、T.S.Eliot の宗教性を巡る考察と、Virginia Woolf の作品を記憶という観点から読み解くモダニズム研究だといえるだろう。

伝記作家としては、この T.S.Eliot の伝記 *Eliot's Early Years* (1977) を第一作として、のちにさらに加筆改訂した *T.S.Eliot: An Imperfect Life* (1999) や、*Virginia Woolf: A Writer's Life* (1986), *Vindication: A Life of Mary Wollstonecraft* (2005) など、代表作は種々の賞を受賞するなど、高い評価を得てきた。彼女のスタンスは、文学作品の読み解きから始まり、作品のバックボーンとなる作家自身の問題意識を抽出していく。たとえば Eliot の場合は、Gordon の関心は、モダニズム詩人としての象徴性よりもむしろ、危機的時代のイメージの背景にある彼自身の信仰と宗教性の探究に向かう。言葉に反映される宗

教的体験を探して、手紙、日記、詩作のメモ、改変されていく作品の変化など、綿密な資料から鍵となる概念を導き出そうとする。Woolfの場合は、彼女の膨大な作品——長編、短編、評論、エッセー、日記、手紙など、彼女の言葉は広汎な領域にわたる——の「源」を、晩年の自伝的エッセー“A Sketch of the Past”を読み込むことを通して幼少期の記憶に辿り、その原風景が作品の中でどのような変遷を辿っていったかを跡づけていこうとする。つまり Gordon は、テキストと伝記的事実の相関関係を探る伝記的関心ではなく、あくまでも言語構築物であるテキストの構成要素の核を模索していく方法論を礎に、人生の中から「人」としての「言葉」を汲み上げていこうとする独自の過程を辿って作品を読み解いていく。

彼女が手掛ける伝記には、伝記的事実を照射しようとする従来の「人と作品」研究とは一線を画し、言葉という精神の表現に、それがどこから生まれているのか、作家が遺した資料から発見する意識が明確にみてとれる。その発見を経て、ふたたび作品の読解に戻るのである。Gordon の仕事は、英文学研究の方法論として伝記的アプローチの一つの有効性を示したともいえる。

その中でひじょうに興味深いのは、Eva Hoffman の場合と同様に、彼女は著名な作家たちの伝記だけでなく、日陰の、いわば無名の人間、“obscure”な存在にも光を当て、そこから歴史の隠れた問題点を引き出す試みにも挑戦しているということだ。とくに *Shared Lives: Growing up in 50s Cape Town* (以下略記 SL, 1992) は、アパルトヘイト時代の南アフリカで生まれ育った半生から自己の遍歴を書き起こす回想記、あるいは自伝と呼べる作品だが、この作品の主人公たちは、さまざまな葛藤の中から自身の人生を発見していこうと苦闘しながら、若くして死んでいった3人の高校時代の友人たちである。彼女たちは、ユダヤ系の移民という出自のもとで、さらに女性としての負荷を負いながら自身の人生を切り拓いていこうとした、いわば“obscure”な、名もなき一生を送った。彼女たちとの友情と、高校卒業後にそれぞれが辿った人生の道程を通してのつながりを、Gordon は自身の記憶を行きつ戻りつしながら記録する。手紙、日記、そして彼らを巡る家族の追憶をちりばめながら、ときに近い友人として、またあるときには、当時の南アフリカ社会を歴史の激動の中に位置付ける遠景の視点から、一人ひとりに声を与えていく。Gordon はそこから、当時の社会問題、人種問題、そしてジェンダーの問題を喚起していった。自身を語り、自分に関わる他者の姿を語りながら、そこに自伝と、回想記と、ノンフィクションの空間を構築したといえるだろう。そ

こには、一人ひとりの人生を構築している意識は何であったのか、それまで手掛けた伝記に共通する方法を通して、人間の実像に迫る視点がみてとれる。

そして、このSLで他者の伝記をまず自伝というかたちにとりこんで言説化することを経て、現在、彼女は母親の回想記 *Divided Lives: Dreams of a Mother and Daughter*⁽²⁾ に取り組んでいる。

南アフリカの片隅で「ひっそりと生きることを選んだ」母の半生を追う Gordon は、彼女の伝記、「回想記」を書き記すことで、その姿を obscure な領域から歴史の前面へと押し出しているといえるだろう。それは、未発表の詩を書き続けた母の言葉に光を当てることで、アパルトヘイトから大きく変貌していく南アフリカで、「書く女」として、そしてやがて黒人白人両方の女性たちを連帯させていく社会活動に身を投じていった一人の女性の姿を立ち現わせるからだ。Gordon の伝記作家としてのありようが、母の回想にも透視されてくる。

II. Virginia Woolf の始源をたどる記憶：Lyndall Gordon の Woolf 読解から

Gordon が母の回想を書きたいと語ったのは、彼女が一昨年英米同時出版で Emily Dickinson の伝記 *Lives Like Loaded Guns* (2010) を上梓した直後のことだった。1年にわたる詳細な資料との格闘を経て、アメリカの女性詩人の内的葛藤と、病によって創出された詩の本質の源流を手練り寄せた大著だった。突然啓示のように現われる幻想 (vision) が何なのか、Gordon は、家父長的ニューイングランドの閉ざされた空間の中で Dickinson が生きた自己閉塞的精神世界に手掛かりを探して分け入っていった。自己省察と内的な充溢が、幸か不幸か病の激しい発作の中で vision をもたらしたことに、Gordon は大いなる興味を喚起される。

創造と病、それは彼女が Woolf の中に見出した一つの重要な水脈でもあった。じっさい、Woolf はエッセイ “On Being Ill” (1926) の中で、「病に在るときは見せかけの現実のは後ろに引きさがり」、むしろ魂の深奥にある聖域でもいふべき「何の轍もない森、誰も足を踏み入れたことのない」場所の存在が顕われてくると記している (McNeillie ed., 1994, 320-1)。健康的な日常世界とは全く異なった現実の様相が、その領域から見えてくる。エッセイの中では、そのような驚きにみちた深遠な世界が、Lee の言葉を借りれば、「予想も

つかないような変貌をとげる様々のイメージがエッセーそのものの形を変化させ」ながら書き綴られ、それが「病だけでなく、言語、宗教、共感、孤独と読書をめぐるテーマを展開」(Lee, 2005, 86)していくのだ。多様なイメージは、水や波、小鳥や雲や空といった、たえず変化し移ろいゆく存在として Woolf の小説世界にも繰り返して反復されているが、それが病の特異な意識世界では、「おおよそ日常的な風景とは異質な、崇高な輝きにみちた色彩に彩られる」(McNeillie ed., 1994, 322)。この現実／非現実、或いは現実とその背後にあるものは、常に Woolf が表現者として言葉で掬いとろうと格闘したものであった。

晩年 1939 年から書き始められた自伝的エッセー“A Sketch of the Past”では、彼女の世界観が幼い頃の St Ives の心象風景から説き起こされているのだが、まずもって Woolf の、そして Dickinson の伝記作者としての Gordon は、このような vision の世界を、病によって誘引された啓示的な内的体験として捉えた。Gordon の Woolf 伝 *A Writer's Life* (以下略記 AWL) には、その病がさらに Woolf の精神疾患とも関わる一種の精神状態のありようをも反映していたことが指摘される (“The Question of Madness,” AWL)。たとえば *Mrs Dalloway* に登場する、戦争体験のトラウマを負って狂気と自殺に向かう Septimus への親和性は、すでにたびたび言及されてきたように「苦悩する者の内面から語られた、ウルフ自身の個人的な経験が反映された想像的な病への考察である」(AWL, 66)といえる。

Woolf と Dickinson、さらに Gordon の母を繋ぐ見えない糸が此处で見えてくることになる。Gordon に Dickinson の詩を教えたのは、母親であったと彼女は述懐する。彼女自身が南アフリカの孤独な生活の中で「読む女」として文学をひもとき、わけても Dickinson の詩に共感を覚えていたことを、Gordon は鮮明に覚えている。そしてこの母もまた、病でたびたび発作を起こして、少女だった Lyndall は母が正気に戻るまで、「バッグから取り出したブラシで、その手をこすり続けなければならなかった」(*Divided Lives*)。

彼女は、読書で孤独な空間をみたただけでなく、ひっそりと詩を書き続け、娘にだけ、作品を読んで聞かせたと言う。伝記作家として Dickinson に迫る Gordon の実に鋭い視点の背後に、母親の姿を記憶から辿る娘の視点が重なっていることは確かだと思う。

また、現在母の回想記の前半を書き終えたばかりという Gordon は、筆者への手紙で記憶についてこう綴っている。

Memory transformed as an art was the great appeal of Virginia Woolf: her memory of blissful 'moments of being', like hearing the waves as a child at St Ives, or memory of the dead, transformed as 'elegy' — I think it was so revealing that she asks herself in her diary if her novels might be described as 'elegy'. My memoir of my mother is influenced by the elegiac impulse, of course, the wish to hold the moment, as she puts it: 'to prod it with my pen'. (2012年9月1日付)

芸術へと変換された記憶は、Virginia Woolfにとって非常に興味引かれるものでした。それは至福にみちた「存在の瞬間」の記憶、子ども時代に St Ives で聴いた波の音がそのまま今も耳に響いているような、或いは「挽歌」に変換された死者の記憶です——それがあまりにも啓示的だからこそ、Woolf は日記の中で作品を「挽歌」ではないかと問うているのだと思います。私が書いている母の回想もまた、もちろん、「挽歌」を書きたいという想いに突き動かされているからなのですが、それは Woolf が言うように、「言葉でその瞬間をとどめたい」という思いなのです。

さらに続けて Gordon は、Woolf 自身が伝記に大きな関心をもっていたことに触れ、“Art of Biography” (1939) の中で彼女が父の Leslie Stephen を念頭において、「偉大な伝記」が描きだす人生——例えば父が手掛けた大著の *Dictionary of National Biography* ——とはなにを以て「偉大」だということのかと自問する文章に注目する。

[Virginia Woolf] declares the lives of the obscure to be potentially as compelling as the lives of great men: 'What is greatness? What is smallness?' ... This gives me courage to write about an unknown mother who would say, 'I'm only a housewife at the bottom of Africa'. (同上)

Woolf は、目立たない日陰の存在におかれた無名の人生もまた、偉大な人間の人生と同じくらい感動的なものであると明言しています。「そもそも偉大さとは何なのか？そもそも小ささとは何なのか？」…彼女の言葉は、いつも「私はアフリカの僻地で生きている一人のごくふつうの主婦なのよ」と言っていた、人知れずひっそりと生きた母の姿を描く勇氣をくれたのです。

この母親の姿、Gordon が回想記という芸術に変換しようとしている存在については後に触れることにして、もう少し、Woolf にとっての「記憶」と、「伝

記」の意味を考えてみよう。

Woolf の伝記への関心

Gordon、そしてやはり Woolf の大部な伝記と作品論を書いた Lee は、ともに Woolf が “The New Biography” (1927) で、現代人の伝記のありように着眼していることを取り上げ、彼女が「事実の真実とフィクションの真実」という「相反する」要素をどのように伝記で融合させるかに関心をもっていた (McNeillie ed., 1994, 478) と指摘する。Woolf にとって、読者を惹きつけるのは、その人間の「人格」であって、「人生がなにより現実性をもって感じられるのは、フィクションとしての人生の方なのだ」(同) と述べている。この実践的な試みが、たとえば “A Biography” という副題を冠したファンタジー *Orlando* (1928) であるといえるだろう。400 年以上の時と空間を生きる主人公のモデルは当時親密な関係にあった Vita-Sackville-West であったことは衆知の伝記的事実だが、Woolf が作品で描こうとしたのは、たしかに一人の人間の「人格」としての姿だといえる。文学史のパロディをも織り込んで社会にも皮肉的なまなざしを投げかける「伝記作者」は、前作 *To the Lighthouse* (1927) で亡き母の挽歌を紡ぎ出した Woolf という「伝記作者」の対極をなすかのように、まさしく「フィクションの真実」を言葉に注ぎ込んでいる。後者の、Woolf が 13 歳で亡くした母 Julia Stephen と重ね合わされる登場人物 Mrs Ramsay をキャンパスに描きだそうとする若き女性画家の卵 Lily Briscoe が抱く苦しいほどの密着した感覚とは裏腹に、*Orlando* はある種の距離で以て描出されている。

この距離こそ、フィクションを招き入れるナラティヴの空間ではないだろうか。この独特のナラティヴは、Elizabeth Barret Browning を飼い犬の視点から描き出す *Flush* (1933) や、さらに遡れば初期の作品 *Jacob's Room* (1922) で、一人の若者が生きた証を残そうとする「伝記作者」にも共有される特徴だといえよう。伝記作家の視点をどこに着地させるのか、これは Woolf にとってひじょうに大きな問題であったことはまちがいない。人間を描くことの不可能性、さらにその内面を「伝記」にどう掬いとることができるのか、これは作家 Woolf 自身の課題でもあったことを Lee は指摘している。

彼女によると、*The Waves* (1931) の 6 人の「人生を描く物語」を life-writing として捉え、Woolf の分身ともいえる Bernard が結局一人ひとりの物語を書き記した手帳と決別する象徴的な行為の中に、人生の不可知性を前景化させた Woolf の意識を読み解く。

Lee は、Woolf 自身が Roger Fry の伝記執筆にひじょうに苦勞した困難が “The Art of Biography” の伝記への省察にあると指摘する。すなわち、人格を立ち現わせる ‘vision’ と、現実の ‘facts’ の本質的な葛藤である。「千のカメラでものを観る時代にあつて、伝記作家の仕事は同じ顔を相反するいくつもの角度から見ることになる」という Woolf のため息にも似た言葉が示唆するように、「たえず異なった角度からみると、私たち自身の観方そのものが絶えず変化せざるを得ない」(Lee, 2009, 81) のだ。「Woolf は、ましていわんや人間の内面の人生は、決して伝記に十分に掬いとることは不可能であると考えていた」(同 474)。

すでに “The New Biography” で、過去の「偉大な」事実ではなく人間の人格から人生を描きだす伝記の可能性に注視していた Woolf は、「花崗岩のような堅固さと、虹のような曖昧模糊としたもの」の両方を内包した「夢と現実、花崗岩と虹の混成物を創り上げること」(McNeillie, ed., 1994, 478) が伝記作家の仕事であると自覚していた。この新たな言説の萌芽を、過去においては Boswell の Samuel Johnson 伝に見、「年代記を記すこと」をやめて「外的な仕事のみならず、感情と思想をあらゆる内的な人生」に光を当てた功績を評価する(同 474)。

また 20 世紀に至っては、等身大の人間像を描く伝記として私生活にも光を当てた Lytton Strachey の *Eminent Victorians* のいささかスキャンダラスな言説が大きな転換をもたらすのだが、Woolf はむしろ Harold Nicolson の *Some People* に軍配を上げ、彼が「自身と自分の周りの人間たちについて実に現実的かつ想像的な記述をしている」(同 475) ことを称賛している。「彼の作品は、二つの両方の領域を見事に捉えていて、真実という確固とした内容物を持つという意味ではフィクションではなく、同時に自由と、フィクションの創造性を有しているという意味では伝記でもない」(同 475-6)。では、Woolf 自身は、この「真実」と「創造性」、或いは「花崗岩」と「虹」をどのように融合しようとしたのだろうか。

Gordon が注目する回想記 “A Sketch of the Past” (以下略記 “ASP”) に、その手掛かりがあるように思われる。一つには、このエッセイが 1939 年から 1940 年にかけて書かれた最晩年のものであつて、そういった意味では「フィクション」としての様々な挑戦を経たあとで自身を対象にした「伝記的」記述に向かった作品であると考えられるからだ。Woolf の病跡研究に取り組んだ神谷美恵子についての論考「『存在』を追って——神谷美恵子とヴァージニア・ウルフ」(2004, 『神谷美恵子の世界』所収) で、この作品に触れているので、

以下ではそこからの引用をもとに再び Woolf にとっての「記憶」について考えてみることにする。

当時、すでに戦局厳しくロンドンからモンクス・ハウスに夫 Leonard と共に避難していた Woolf の生活は、おそらく不安と緊張とは無縁ではあり得ないところに至っていたと思われる。日記にはそのような精神状態を思わせる記述が散見されるだけでなく、いよいよ自死に至る直前には、「きっとまた狂気が襲ってくるような気がします。あの怖ろしい経験に、こんどは耐えることはできないような気がします。さまざまの音が聴こえてきて、精神を集中することができないのです」(夫 Leonard 宛ての手紙、1941年3月28日)と書き残している。

そのような緊張の中で、Woolf は「過去の自分と現在の自分とは互いに影響し合っているものだという考えから……、戦時下のマンクス・ハウスにおける自分と過去の自分との間を行きつ戻りつして」(神谷 149, 表記ママ) 回想を書き記した。神谷はこの書き方を、「自分でありだした方法ではなかろうか」(同 150) と指摘する。Woolf が「瞬間」を言葉で書き留めることにこだわり続けた作家であるという前提から考えると、敢えてここで、過去の「瞬間」に立ち戻ろうと試みる Woolf の意識には、自分の原点ともなった過去の再構築、或いは過去との関係性から現在の自己存在を再創造しようとする意思が強く働きかけているとはいえないだろうか。

その過程で彼女がこだわり続けているのが、「非存在」の中から突如として顕現される「存在」の啓示的瞬間だといえるだろう。病の中で訪れる vision とも通底する啓示的瞬間は、“ASP” では子ども時代に毎夏を過ごした St Ives での記憶から呼び戻される。13歳で訪れた母の死という大きな衝撃までの毎夏を、少女期の Virginia Stephen は、このイギリス最南端の海辺で過ごしている。終生「波の音」が彼女の記憶の中に呼び戻されるのは、この幼少期の記憶がいかに強烈であったかということを物語っている。その記憶の中核にあるのが、おそらく当時は意味づけることが叶わなかった「啓示的瞬間」の感覚ではなかったろうか。その瞬間を「フィクション」というかたちで、さまざまの実験を通して言語化してきたのだと Gordon は見る。それが、“ASP” では、あくまでも自身の経験として語り直されるのだ。自伝的な回想という形態が、晩年の彼女には必要となったといえるのかもしれない。いずれにせよ、自身の「存在の瞬間」を、過去から記憶を現在に招き入れることによって、Woolf は世界そのもののありようを再構築しようとしたのだ。

幼少期に St Ives で突如として彼女に訪れた啓示的瞬間の記憶、その一つが、

兄との喧嘩で「彼に手を振り上げた刹那、私は突然、なぜ人を傷つけるのだろうと感じた」(“ASP”, 71) 衝撃の瞬間だった。それを現在の Woolf は、「絶望的な悲しみの感情だった」(同) と記述する。またもう一つの記憶は、花を見つめていた彼女に「突然、花そのものが大地の一部だと感じられ」、「あれが統一なのだ」(同 72) と全き秩序が顕現する啓示の瞬間に打たれた記憶であった。この「突然の衝撃」こそ、自身をして作家たらしめるものになったのだと述懐する。その感覚を説明することの「喜び」こそ、自身に与えられた貴重な経験であることを自覚する Woolf がここにいる。それは、「綿」のような非存在の中から突然「存在」が現われる瞬間であり、「綿の背後に隠されているパターン」の発見、「現実の背後にある何かしらの真実の徴」の発見である(同)。彼女は「それを言葉で表すことで、現実にしていく」(同) のだ。「それを統一体にするには、唯一言葉で表現することによってのみ可能なのだ」(同) と明言する彼女にとって、「書き記す」行為が、自身の存在の必然であった。そして“ASP”にあって、それはまさに「真実」と「フィクション」の両方を混然と一体化した回想として、彼女の始源を照射することになった。

To the Lighthouse で自伝的フィクションを試みた Woolf が、そこでのカタルシスを経て、回想を通して自己を語る伝記の言説を編み出したといえるだろう。10年の「時間」を経てようやく Lily が絵を完成し、そこに Mrs Ramsay の姿を留めて vision を捉えたと感じたように、Woolf にとっても、“ASP” は、彼女自身の「人生の時間」の経過を経て、非存在から存在が抽出されるとても重要な仕事であったのではないか。彼女は決定的な過去の瞬間を呼び戻してそこに言葉を与え、言説化することで、自身の存在をいまいちどたしかめようとしたにちがいない。

Lee はそれを「自分自身を救う」試みであったと指摘し (Lee, 1996, 20)、Gordon は AWL で「人生には必ず始源がある」というタイトルを第一章に冠して、Woolf が回想というかたちの自伝的言説で、たえずそこに立ち戻っていく原点を記したと捉えるのだ。

記憶の言説化によってたえず始源に立ち戻る、このありようが、Gordon をして回想記に取り組み契機となったのは偶然ではない。

Ⅲ. 伝記というテキストと時間： Hermione Lee の Virginia Woolf 読解から

Gordon は“ASP”にインスピレーションを得て、Woolf が回想を通して「時の変化にも耐えうる肖像画を描こうとした」(AWL, 4) ことに着眼し、自身が彼女の伝記を書くに際して「[彼女の初発となった記憶への] 創造的な応答」を試みた。作品の中に、その始源へと立ち返っていかうとする反復と変奏を読み解き、書き記す行為によって過去を留めようとした Woolf の姿を伝記から照射したのだ。そして Gordon 自身が、Woolf が“ASP”を記した年齢を過ぎ、障害をもって生まれた孫との邂逅を経て、自身の人生を省みてその始源を母親との関係をめぐる回想 *Divided Lives: Dreams of a Mother and Daughter* に顕現させようとしていることは、大変興味深い。他者との関係性のもとに自己を再確認する行為が、まさに事実とフィクション—— Gordon の言葉でいえば「素材としての真実と、そこから展開する想像力から生まれるもの」(AWL, 38) ——としての伝記から立ち現われようとしているからだ。Woolf の回想を評して、「記憶は光を放つが、そこから何かを照らし出すことができるのは想像力によってのみなのだ」(同) と Gordon は言う。記憶そのものではなく、それをどのように加工して伝記或いは回想記に刻印するのか、すでに *SL* で挑戦した“obsucure”の存在から「50年代の南アフリカ」に生きた女性たちの姿を照らし出した Gordon の新たな回想記には、おおいに興味をそえられる。

さて、伝記作家として、そして Woolf 研究者として、Gordon と双壁をなす Lee の Woolf 解釈は、翻って過去への遡行を辿る Gordon とは対照的に、未来への変化に注目した読み解きを行っている。彼女の「伝記をめぐる」エッセー、*Body Parts: Essay on Life-Writing* (2005) である。この中で Woolf についてところどころ言及しているのだが、とくに作家の伝記をテーマにしたシンポジウムでの議論をもとにした⁽³⁾ “Virginia Woolf’s Nose” という独立した章では、作品そのものがウルフの life-writing であるという観点に立って *Mrs Dalloway* (1925 以下略記 *MD*) を取り上げている。

なんとも奇妙なタイトルは、Michael Cunningham がいわばインターテキストチュアリティとして *MD* をもともとの Woolf の原案であったタイトル (*The Hours*) を冠して重層構造の中に入れ込んだ小説を書き、その翻案から David Hare の脚本と Stephen Daldley がディレクターを務めて映画化された “The

Hours”を意識したものである。主演で Woolf を演じた Nicole Kidman の不自然に誇張された「鼻」に由来するタイトルなのである。

もともと、Lee は伝記論として、「伝記作家たちはさまざまな部分（資料や証言、物語、時系的事実）を組み合わせ、それをページの上で構成して、伝記の対象となる人物を創り上げていく以上、その過程で手を加えたり歪めたり、新たな像を創り上げたりする」（28）という発想から、人物全体を構成する「身体の部分」をどうつなぎ合わせていくか、というテーマをタイトルから引き出す目論見をもっていたのだろう。いずれにしても、悪評高くなってしまった Kidman 演じる Woolf の鼻は、実は深いところで Lee の論点を突いている。というのも、Lee が伝記作家として *MD* の変化を “The Hours” と関連づけて論じる重要な力点は、ウルフ像が時代によって書き換えられていくことの意味にあるからだ。

まず Lee は、「意識の流れ」を確立した実験的モダニスト作家にして、ヴィクトリア朝から脱却していく変化の時代を生きた一人の女性、さらに前衛的なブルームズベリー・グループの洗礼を受け、一方でフェミニズムに協働するエッセーで時代の先鞭となったウルフが、実に多面的に現代まで読み継がれている現象を指摘する。その多層性はウルフ文学そのものの特質でもあるわけだが、初期の代表作ともなった *MD* について、Lee はそれが「ウルフの人生そのものをフィクションにした理想的な小説、それ自体が life-writing についてのテキストとなっている」ことを指摘する（31）。一日の射程の中で「一人ひとりの人間が外からは読み解くことができない内面世界を生きている様相が、幾重にも重なる記憶や感情、日常の習慣や思考や応答を通して描き込まれてゆき」（同）、表層的にはまったく繋がらないものどうしの関係性が、小説の言語を通して繋がっていく。当時の Woolf の最大の関心事であった「形式」が、「ロンドンの一人の女性の姿を描くこと、表面的には全く異なった次元にある二つの戦後の人生を繋ぐこと、そして正気と狂気という対極にあるもの同志を関連づけて、一つの全体像を形成していくこと」を見事に成し遂げているのだ（同）。

最初は一人だった登場人物を Clarissa と Septimus に分化して、そのそれぞれに Woolf 自身の意識を反映させること、そこにも、Woolf の人生が透視される life-writing の技が巧みに生かされている。「流動的で、内面と外面の時間を自由に行き来するナラティブが、あるときは直近の、またあるときは想像上の経験や空間、場所と精神の物語を織りなしていく」（同 33）精緻な言語空間を構築し、そこに戦争という時代の文脈の中での Woolf 自身のありよう

が掬いとられていくのである。

この動的なナラティブは、同時に人生が固定化されたものではなく、実に移ろいやすいものであるという Woolf 自身の世界観、そして人生の不可知性を反映している。人生はしたがって帰結せず、Woolf の死後も、新たな彼女の像が構築されていく可能性が未来に拓かれているのである。

そして、その新たなウルフ像の「翻訳」が、“The Hours”に出現したことになる。Lee も指摘するように、この映像から牽引される大きな Woolf 像の転換は、舞台がアメリカに設定された二つの別の物語——一つは、1949年ロサンゼルス郊外に暮らす平凡な主婦 Laura Brown の、死への誘惑を内包した内面の物語、いま一つが、20世紀の最期に設定された現代に、バイ・セクシュアルのニューヨーカー Clarissa Vaughan が、エイズで死を目前とした作家 Richard Brown の受賞を祝うパーティを企画して MD の Clarissa Dollway よろしく花を買うところから始まる一日の物語——が交錯し、そのサブ・テキストに MD が登場することによるだろう。この二つの物語は、Laura の息子が長じて Richard Brown であることがわかるところで繋げられるのだが、果たしてこの Richard Brown は、MD の Septimus を反復して自死を遂げるのだ。MD は、この二つの物語のインターテキストとして有形無形に Woolf の存在をそこに刻印している。

そしてまた他方で、1923年リッチモンドを舞台にまさに MD を世に出すべく苦悩する「書く女」としての Woolf の物語が、冒頭の入水自殺という結末から語られていく。Kidman の Woolf 像の是非にとどまらず、この大きな転換は賛否両論の議論を呼んだ(42)。少なくとも Cunningham は、精神の病に脅かされながら振り子の振幅のように人生の喜びと憂鬱を行き来する Woolf 像をクローズアップすることで、彼女の死を「ヒロイックなもの」に演出し、彼女の内面世界の捉え方に実に大胆な転換をもたらす物語を創出した。敢えて「何も口をはさまない」という Lee のスタンスは、「実在した人物がフィクションに変えられ、創り上げられた内面と声をもって登場するのを観たくない」という伝記作家としての潔癖な思い(36)によると彼女は言う。しかし、同時に Lee は冷静に Woolf 的な世界がどのように新たな作品の中でテキストとして機能しているかを観察し、「断じてオフィーリアではない」(40) Woolf の死がロマンティックな死として描かれたことに反感を示しながらも、「小説と映画の両方が Virginia Woolf への追悼の場を創出したところに、MD から長い時間がたち、その著者が世を去って久しい現在でもいまだに語るべき

雄弁なテーマがあること」(同)を指摘するのだ。たしかに、三つの物語それぞれが照射する「死」のテーマ、そこには逆説的に「生」の主題が、そして「人生」の主題が内包されているのではないだろうか。

その主題は、まさしく伝記という過去を語る言説のテーマでもあるだろう。Leeの伝記論では、伝記においてどのように「死」を描くかの重要性が最後に強調されているが(同、“How to End It All”)、“Virginia Woolf’s Nose”は、Woolfの死後も生き続ける afterlifeとしての Woolf 文学と、その作者の姿を現代に示した。人生は帰結しない、ということもできるだろう。それは Woolf にとっての作品が彼女の life-writing であったと見る Lee の、伝記作家としての読み解きの結論でもある。

Gordonの過去への遡行というスタンス、過去を現代に刻印するという「伝記」観とともに、Leeの未来に拓かれたテキストとしての「伝記」という読み解きは、まさに「花崗岩と虹」の混成を現代の伝記の理想として思い描いた Woolf に関わった二人の仕事から示された知見だといえよう。

IV. 記憶の翻訳：Lyndall Gordonの回想記

I am to be my mother’s ‘sister’. Not a writer.... ‘I’m only a housewife at the bottom of Africa’, my mother says, mindful of womanly modesty. Like other women of her generation, she will not put herself forward. All the same it’s a statement of sorts to her daughter and three friends who know she ‘scribbles’. More secret, confided alone to my upturned face, is that she, suburban housewife with no credentials, is taking on the role of the biblical Patriarchs. To take on life as a series of ‘Tests’ implies that she merits the attention of her Maker. (*Divided Lives*, 1)

私は母の「妹」になることを期待されている。作家になるのではなく。……「私はアフリカの隅っこで生きるただの主婦よ」、女性らしい謙遜をたえず忘れない母は、いつもそう語る。同世代の女性たち同様、母は決して前に出ようとはしないだろう。それは、彼女がひそかに「ものを書いている」ことを知っている娘の私や、三人の友人たちにも変わらず語る言葉だ。母を見上げる私だけが知っている、さらに重要な秘密がある。それは、何の資格ももたぬ片田舎の主婦である母が、聖書の

教えを説いているということだ。人生には幾度も「試される時」が訪れるということは、母にとってはそれが創造主と向き合う経験そのものだということを意味しているのだ。

母の回想の冒頭に Gordon が記した言葉は、南アフリカで生まれ育ったユダヤ人の母が、まさに ‘obscure’ な存在として生きた一人の女性だったことを語る。ひっそりと、人知れず詩を書き、それを娘に読んで聞かせていた。その詩は、南アフリカの広大な風景を題材に、魂の深みに分け入っていく、宇宙的な、象徴的な、拡がりをもつ美しい作品だった。たとえば…

Like a tree born in dawn dark crystal stillness
 Roots clasping native stone
 My spine, my staff
 For I am home.

黒水晶の静寂が佇む暁に生まれた一本の木のように
 その根はしっかりと地の石を抱く
 私の背骨、私の杖
 私の故郷だから

アフリカの広漠とした風景を詩に描き続けた母親のこの作品を、Gordon は墓石に刻みたいと記す。深遠な魂の目で風景を見る一人の女性の内面が、そこに重ね合わされてくる。広大な空間に、自身の存在を融け込ませるシンプルなイメージに、まっすぐな精神の発露を見る。彼女にとって、詩作とは何だったのか…。

Klaver

Across the River
 where the long hills lie
 side by side with the morning sky
 children’s voices, chipped out of silence.
 And as a child’s undarkened breast
 is pure as the air she breathes
 so, free of dross a moment

the soul receives
Thy Presence.

「クレイヴァー」(地名)

川を渡り、長く連なる丘の稜線に
朝焼けの空が重なり
子どもたちの声が沈黙にこだまする
まだ穢れを知らぬ子どもの心のように
彼女は冴え冴えと透明な空気を吸い込む
そのとき、一点のくもりもない魂が
創造主の臨在を知る

人生の後半、イスラエルから来た聖書学者に導かれて、かねてから深く関心をもっていたヘブライ語と聖典の読解へと引き込まれていった彼女は、きっぱりと詩作をあきらめ、娘の Lyndall (のちの Gordon) がアメリカの大学院に留学するや、こんどは神学を学んで、ユダヤ教の伝道に自己を捧げる。この詩の中には、そういった自分の魂の希求の軌跡が透視されるのではないだろうか。

Gordon によると、母親は閉鎖的な南アフリカの社会の中で、「自分だけの世界の希求」を読書と詩作によって続けていたという。それは終生続いた彼女の内面の旅であった。

人知れず詩を書いていた彼女の才能がふとしたきっかけで花開くのは、彼女が1952年に、スポーツジャーナリストであった夫とたまたまヘルシンキのオリンピックに出かけたことに端を発する。現地で出会ったフィンランドの編集者が、いち早く彼女の才能を見出し、詩をもっと書いていくべきだと勧めたのだった。ついに詩集が出版されることはなかったが、彼女は1962年、単身イギリス留学を決意して、まだ十代の娘や夫をおいてイギリスに渡る。1年の約束だったという。

彼女は「詩人クラブ」に参加し、人前で自分の詩を読み、そしてそれが評価されて、「詩人」としてスタートを切る。まるで嘘のように病は姿を消し、生き生きとそれまでとはまったく別の人生を謳歌する母を、娘は誇りに思いこそすれ、決して戻ってきてほしいとは思わなかったのだと Gordon は言う。

ところが、約束の1年にも満たぬうちに、夫は妻を南アフリカに呼び戻す。

その理不尽な命令に、静かに従うのが従来どおりの母だった。しかし、元の彼女に戻ったわけではない。南アフリカに戻るや、彼女は娘の Lyndall とともにケープタウンで大学に通って英文学を修めた。

その一方で、奇しくもアパルトヘイト反対運動のうねりが南アフリカをおおっていた時期、彼女は、白人黒人両方の女性たちを対象に聖書学校を開催したり、集会を開いて女性たちの連帯をつくりあげていった。

詩作はストップしたものの、この頃には物語を書いて、作品はいくつかの雑誌にも掲載された。かつてユダヤ人たちの孤児院で、図書館員として子どもの本の読み聞かせを続けていたことが、そのようなかたちでまた形を変えて展開したのかもしれない。

Gordon は、「母と娘の物語」として、娘の視点から、この一人の稀有な女性の姿を描きだそうとしている。残された手紙や日記、世間には発表されなかったとても美しい詩などを素材に、自身の記憶を織りまぜて描き出される世界は、彼女にしか創作することができない「伝記」或いは「回想記」となるだろう。Woolf 文学を「記憶」の伝記として捉えた Gordon の視座は、こんどは自身の過去と始源を探る過程を通して、かつて Eva Hoffman が自伝を「自己翻訳」と読んだように、Gordon の記憶の翻訳となるのではないか。

過去の文脈から現在の文脈へ、そして南アフリカからイギリスへ、彼女自身の人生のテキストの移動は、まさしく文化翻訳の視座をもそこに招き入れるにちがいない。

南アフリカから現在へ

南アフリカという地で生きた無名の女性たちの人生を現在の時間の中でよみがえらせる構想は、高校時代の友人たちへの追悼としてすでに *SL* という実りをもたらしている。そこでの試みは、若くして病で世を去った3人の級友たちの葛藤とその背景となった1950年代のアパルトヘイト政策下の南アフリカを描き出すことだった。とくにユダヤ人移民としてたえず出自を意識しながら、ときには窮屈な女子校の規則や教師に抗い、恋に躊躇し、南アフリカから異国へと自らを解き放つことで新たな自己を探していった Romy に光を当てた構成は、それまで Gordon が伝記で描いてきた作家たちの姿とはまた異なる人生のありようを映し出すことになった。自身の言葉によって遺された作品から人生を読み解くのではなく、生き方そのものから、人間が何を抛り所に生きていくのか、その根本的命題を引き出しているからだ。そこ

で語られる声は、作家たちのように自身の声であるよりもむしろ、物語の語り手としての Gordon 自身の声である。「Romy について書くことで、私は再び彼女を生きさせるのではないだろうか？」(SL, 285)と彼女は記す。

或いはまた伝記作家と、友人としての自身の視点の間に立って、こうも問いかける。

「私たちが関係性を創り上げない限りは、何の繋がりも見出すことはできない。過去の遠景に遠ざかれば遠ざかるほど、現在のどこにいるときよりも、Romy の存在は完全なものとして見えてくる。ここにいないからこそ、この不在ゆえに、私は彼女の実在を見ることができるのだ。Romy の像を、私が自分のなかに創り上げることで、彼女はずっと存在し続けられるのではないのだろうか？記憶は、なによりも生き長らえることができる伝記の形になるのではないだろうか？」(同 296)。そもそも「簡単に真実など見つけることなどできない」(同)と Gordon は言う。「伝記作家とその対象は、それぞれ分かれた半身として、想像の中で出会うのだろう。生きる者と死者として。これが本質だという真実など、存在しないのだ。伝記的な客観性というのは、幻想にすぎない。…生き続ける真実に至る唯一の道筋は、事実を基軸にして、人生を想像の中で組み立てることよりほかない。それは、ぎりぎりフィクションとの境界までもっていく営みだ」(同)。

Woolf の伝記よりも遥かに肉薄した感覚で死者の存在を言説化しようとする Gordon は、自身の人生をもその中に描き込むことで、「想像の中での出会い」を果たし、すでに現実には存在しない死者との「関係性をそこに構築」しようとしている。手紙、記憶の断片から拾い上げられた会話、自身の日記、こうした「かけら」を繋ぎ合わせながら、一人ひとりの人生が関わっていることを浮かび上がらせる。その関わりは、個人的な友情という関わりを超えて、1950年代のケープタウン、そしてアパルトヘイトが突き崩されていく変貌を遂げる南アフリカ、そして women's cause のテーマへと物語の枠組みを広げていく言説になっていく。その枠組みの中で、「人権のために生きる」覚悟を Gordon の中に育む動的なナラティブが構築された。母親の姿が、すでにその遠景に見えるのは、次の Gordon のテーマがここで萌芽しているということかもしれない。

同様に、一方で、深層意識の中で流れ続ける南アフリカの風景は、Gordon 自身の始源として、そこで再確認されている。ここにもまた、母親の姿が刻印されている。

SLからさらに20年、Gordon自身が孫の誕生を人生に迎え入れる経験を経て、彼女は自身の家族の物語を母との関係から書き記そうとしている。この二つの自伝的回想記を読みくらべていくことから、おそらく多くの発見があることだろう。来年の春という*Divided Lives*の完成を待って、そのことを次の課題にしたいと思っている。語られなかった声、書き記されなかった言葉が、そこでGordonの「翻訳」を通して現代に繋がれるだろう。

註

- (1) 「エヴァ・ホフマンと二つの自伝」『津田塾大学紀要』2010、「他者を語る試み」(『〈終わり〉への遡行』英宝社、2011)、『世界文学を継ぐ者たち』(集英社新書、2012)ほか参照。
- (2) 本稿で引用したLyndall Gordonの回想記*Divided Lives: Dreams of a Mother and Daughter*は、2013年5月刊行予定のものであり、筆者が参照したのは原稿の草稿であることをお断りしておく。したがって、出典については本文のみに記しておく。
- (3) Leeの註釈に以下の記述がある(Lee, 2005, 221)。Conference on 'Writing the Lives of Writers', Senate Housed, London, Centre for English Studies, London, 1-3 June 1995.

参考文献

- Cunningham, Michael. *The Hours*. London: Fourth Estate, 1989.
- Gordon, Lyndall. *Eliot's Early Years*. Oxford: OUP, 1977.
- . (1986). *Virginia Woolf: A Writer's Life* (New, revised edition). London: Virago, 2006.
- . (1992). *Shared Lives: Growing up in 50s Cape Town*. London: Virago, 2005.
- . *T.S.Eliot: An Imperfect Life*. New York: Norton, 1999.
- . *Vindication: A Life of Mary Wollstonecraft*. New York: Harper Collins, 2005.
- . *Lives Like Loaded Guns: Emily Dickinson and Her Family's Feuds*. London: Virago, 2010.
- 早川敦子. 『『存在』を追って——神谷美恵子とヴァージニア・ウルフ』. みすず書房編集部編『神谷美恵子の世界』. 東京: みすず書房、2004、132-149.
- Hoffman, Eva. *Lost in Translation: A Life in a New Language*. New York: Dutton, 1989.
- . *After Such Knowledge: A Meditation on the Aftermath of the Holocaust*. London: Secker & Warburg, 2004.
- 神谷美恵子. 『ヴァージニア・ウルフ研究』. 東京: みすず書房、1981.
- Lee, Hermione. *The Novels of Virginia Woolf*. London: Methuen, 1977.
- . *Virginia Woolf*. London: Chatto & Windus, 1996.

- . *Body Parts: Essays on Life-Writing*. London: Chatto & Windus, 2005.
- . *Biography: A Very Short Introduction*. Oxford: OUP, 2009.
- Marcus, Laura. *Autobiographical Discourses: Theory, Criticism, Practice*. Manchester: Manchester UP, 1994.
- Smith, Sidonie, and Julia Watson. *Reading Autobiography: A Guide for Interpreting Life Narratives*. Minnesota: Minnesota UP, 2010.
- Whitehead, Anne. *Memory*. New York and London: Routledge, 2009.
- Woolf, Virginia. *Jacob's Room*. London: The Hogarth Press, 1922.
- . *Mrs Dalloway*. London: The Hogarth Press, 1925.
- . (1926). "On Being III." In Andrew McNeillie (ed.), *The Essays of Virginia Woolf Vol.4 1925-28*. London: The Hogarth Press, 1994, 317-335.
- . *To the Lighthouse*. London: The Hogarth Press, 1927.
- . (1927). "The New Biography". In Leonard Woolf (ed.), *Collected Essays*. London: Chatto & Windus, 1966-7.
- . *Orlando*. London: The Hogarth Press, 1928.
- . *The Waves*. London: The Hogarth Press, 1931.
- . *Flush*. London: The Hogarth Press, 1933.
- . (1939). "The Art of Biography." In Leonard Woolf (ed.), *Collected Essays*. London: Chatto & Windus, 1966-7.
- . (1947). *The Moments and Other Essays*. London: The Hogarth Press, 1981.
- . *Granite and Rainbow*. London: The Hogarth Press, 1958.
- . "A Sketch of the Past." In Jeanne Schulkind (ed.), *Moments of Being* (Revised and enlarged edition). London: The Hogarth Press, 1985, 64-159.
- . *The Diary of Virginia Woolf*. Ed. McNeillie, Andrew, and Anne Olivier Bell. London: The Hogarth Press, 1977-84.